

5・19の望遠レンズ

劉 心武

(解説) 泉 敏弘

(翻訳) 桜庭ゆみ子

劉心武「5・19長鏡頭」を読んで

(東海大学講師) 泉 敏弘

「5・19長鏡頭」の作者、劉心武(1942—)は1961年に北京の師範専科学校を卒業後、北京第13中学に国語教師として赴任し、ここで文化大革命の10年間、クラス担任を勤めた。この時の経験を基に、文革期の加害者であり、また被害者である——つまり文革の極左思想をもてあそんだ加害者であり、また極左思想の被害者たる少年、少女たち——を描いた「班主任(クラス担任)」を書き、文革が子供たちの魂に残した傷を描きだした。文革後の中国文学の主流となった「傷痕文学」の代表作の一つとなっている。「班主任」は1978年『人民文学』の優秀短編小説賞を獲得している。

「傷痕文学」の定義が「文革の終結後、被害者の立場で文革の惨害を書いた文学作品」とするならば、その流れは、文革終結から9年目、文革とは一見なんの関係もない1985年5月19日、北京の工人体育場で発生した「5・19暴動事件」を描いたこの作品にも引き継がれている。

「班主任」の主要テーマは文革が若い世代に与えた傷痕であり、この「5・19長鏡頭」のそれは文革によって置き去りにされたまま成長した過去の若い世代たる現在の青年たちなのである。

「5・19事件」のあらましを紹介しておこう。
1985年5月19日、北京工人体育場において、メ

キシコでの第10回ワールドカップ・サッカー大会への参加をかけて中国ナショナルチームと香港チームの予選試合が行われ、中国ナショナルチームは1対2で敗れた。その直後、失望した群衆による騒ぎが発生した。8万人収容のスタンドからジュースプラスチック容器2995本、ジュース瓶156本、パン143個、半かけのレンガ13個、りんご15個がフィールドに投げ込まれた。さらに場外に駐車していた外国人の車が数台被害を受け、当夜127人が逮捕された。20日の新華社報道は、この出来事を「国の品位を損なう事件」とであると論評、北京市当局は「騒乱」の参加者を厳しく処罰すると報道した。

29日、中国ナショナルチームは解散、30日、国家体育委員会の袁偉民及び女子バレー選手の郎平、男子体操選手の李寧が被逮捕者にその非を諭す訓話をした。31日、中国サッカー協会はナショナルチーム監督、曾雪麟の辞職願いを受理。6月4日までに少数を除き拘留されていた青年たちが釈放された。

以上が所謂「5・19事件」の経過である。「長鏡頭」とは望遠レンズであり、「5・19長鏡頭」というタイトルは作者の劉心武がカメラ・アイをもって忠実にこの事件を写したものと言えよう。関係当局は騒乱参加の青少年を「国家の品格」を傷つけた「害群之馬」(公益を害する害虫)として処罰したが、「国家の品格」とはなにかを劉心武は問い直そうとしているのである。

「5・19事件」直後、ブリュッセルで行われたイギリス・イタリアのサッカー試合でも多くの死傷者を出す事件が発生した。この騒動の主な参加者はイギリス人であり、国際的に多くの批判が彼

らに向けられた。しかしイギリス政府は償うべきは償い、裁くべきは裁き、事件は極めて合理的に処理された。サッチャー首相も事件を非難したが、その処罰の根拠として「国家の品格」などはあげていない。

中国では「5・19事件」に類似した民衆騒乱が何度か発生している。1981年の対クウェート戦、1983年の対マンハイム戦などだが、これらについて中国当局は「国家の品格」という問題には触れていなかった。何故今回に限って、「国家の品格」が論じられたのか、作者ならずとも我々の興味を引くのである。

問題点の一つは、この事件を真っ先に報道したのが中国駐在の外国人記者であったことである。即ち事件は先ず外国で報道されたのである。これを受けて、新華社通信は彼ら青少年は「公益を損なう害虫」であると論評し、「国家の品位」を傷つける行為として嚴重に処罰するという関係部門の発表を報道したのである。即ち、もし外国報道がなかったなら、あるいはこの事件も前述の81年、83年の事件と同様、「国家的事件」にはならなかったかもしれないのである。作者は、先ずこの点について「我々は国際世論を国内世論よりもはるかに重視するようだ」と指摘している。

中国関係部門が青少年処罰の根拠として「国家の品位」という極めて「倫理的」な概念を持ち出したことに注目したい。「家臭不可外揚（家の恥を外に出してはならない）」という中国の諺語は、そのまま国家にも当てはまるのであろうか。この「家」を国家に置換するならば、「5・19事件」の外国での報道は「国辱」なのである。中国における国家と民衆の間の距離は、ある意味で非常に近いとも言える。それは国家の側だけでなく、民衆の間でも国家が占める位置は大きい。それは作品の中で逮捕者の一人を同僚が「国辱ものだ」と罵っている例からも容易に見てとれる。この様に「5・19事件」は国家にとっても民衆にとっても

「恥」なのである。

しかし劉心武は、「国家の品位」というものを過度に考える必要はない、と主張し、『華僑日報』など海外での事件の報道ぶりを引用しながら、スポーツ競技での熱狂と「国家の品位」を関係づけることに反対している。諸外国はこの種の騒乱を「国家の恥」だとはしていないではないかと言うわけである。

一方、外国記者による「5・19事件」に関する報道姿勢は2種類あった。すなわちスポーツ競技場で起こったファンの熱狂を「その地域の社会全体の精神文化と大した関係はない」とする態度と、中国人の「排外意識」の現れであり、その背後に政治、社会問題があるとする態度である。

後者の代表的な例として、イギリスの報道は、「これらのサッカーファンは、60年代の文化大革命で過激な行動をとった紅衛兵のうち、失望を感じた一部ではないか」と述べている。こうした意見に対して、劉心武は次のようなもう少し違う見方をしている。

「“5・19事件”は単純かつ複雑、複雑かつ単純である。単純なのは、この事件が国家、民族、政治、道徳にかかわりなく、人類共通のスポーツ・ゲームにおける熱狂的発作だということである。複雑だというのは、この事件がわが中国民族特有の心理的沈澱、ここ30年の政治的、経済的変動の心理的な投影、文化大革命によって産みだされた世代の驚くべき教養の低さ、中国社会に息抜きの場が不足していること……などなどが混ざり合っていることである」。

さらに劉心武は「集団的無意識」という言葉を使って次のように述べている。つまり「人間の思考活動は、いくつかの段階の層に分かれている。最も表面の層では、外界の事物に対して感覚的に好き嫌いの判断が行われる。その次の層では、具体的な功利性を主眼とした一連のもくろみがなされる。そしてさらに奥に進むと、そこでは個人の

経験と集団の一員としての「集団的無意識」とが交錯し化合するのである」。

そして若い騒乱参加者達（劉心武は、「烏合の衆」とも呼んでいる）を一つに結び付けたのはこの「集団的無意識」であると言っている。「集団的無意識」集団とはどんなものか。劉心武によれば、彼らは先ず第一に、文化大革命によって徹底的にダメにされた世代である。彼らの教養は「驚くべき」低さにあり、彼らの幼年時代は文革に振り回され、成長しては「開放政策」の下で林立するビル群、自分達には「入れない」超高層ビルの谷間を蠢くのである。彼らの胸にはつぎつぎと新たな思いが「沈澱」していく。ここでいう「沈澱」は「昇華」に対する概念であり、昇華されることのない精神的[・][・]がたまっていく。

「漠然と建国門を通り過ぎ、国際倶楽部、友誼商店を通り過ぎ、そして建国飯店と京倫飯店を通り過ぎた時、（やがて騒乱に参加し、逮捕される青年の頭に）ぼんやりとある考えが浮かんできた。これらの場所には、自分達中国人は入れないのだ」と、「建国や京倫ホテルに俺たちは入れねえんだ。ガラス窓からぼんやり見えた豪華なシャンデリア、きらびやかな食卓、裾の大きく切れたチャイナドレスをまとったウエイトレス。試しに自分と小瑛子（青年の恋人）をガラスの向こう側に置いてみるが、またいまましげにそんな空想を打ち消した。彼らはまた、現在の対外開放によって流入する「香港の通俗的な文化と東洋（日本）の商業文化の最も熱心な受容者達なのである」。

要するに彼らは、社会の変遷の中で、これらの「沈澱」物を抱え、浮き沈みを続けてきた世代に属しているわけである。彼らがナショナルチームの敗北を契機に「外国排斥」を叫んだとしても、それは「中国民族特有の心理的沈澱物」と彼ら自身の新しい「沈澱」との化合物なのである。

開放政策の進展は、中国社会内部をさらに外に^{さら}晒すことになる。その中で「国家の品格」をどこ

まで守らねばならないのか。作者は、以下の提案をする。

「我々は、国際世論を国内世論よりもはるかに重視するようだ。……我々はもっと冷静になる必要がある。国内の世論、特に一般庶民の、そしてそのうちの青年達の、あけすけな、あるいは婉曲な、従順な、または反抗的な反応をもっと重視すべきだ」

「（彼らは）文革の大混乱のなかで徹底的にダメにされた世代に属している。大混乱の中で小学校に入り、正規の授業がほとんど行われなかった「教育革命」の中で中学時代を過ごし、その後すぐ職探し、そして労働者となり、「浅はかな思想」水準のままに青春を迎えた。……我々の方にも彼らに対して何か欠けているものがありはしないか。例えば、十分な理解や許容、心遣いとか愛情とか。つまり彼らには沈澱を昇華させる場が無いのだ、と劉心武は主張する。

「集団的無意識」に操られた行為は一種の盲動あるいは条件反射と呼んでよいであろう。とすると、この集団的無意識に操られるのは単に騒乱に参加した若者だけではないのだ。外国人が中国を観察する場合にもなにか「無意識」に反応していることはないだろうか。

ともあれ劉心武によれば、中華人民共和国が成立して以来、各種各様の政治運動が連綿と続き、その過程で、中国社会に起こる現象をすべて政治に結び付けてしまう傾向が、特に文化大革命時代に強かった。立場こそ異なれ、「5・19事件」を政治に結び付けようとする動きすら中国国内にはありうるのである（「面白いことにサッカーとはまるで縁がなく、球場に足さえ踏み入れたことのない中・高年層の人々の間でささやかれた」のであるが）。中国のこうした国内事情もあって、外国人の中に一つの思考パターンが形成されている。「5・19事件」を[・][・]政治的に解釈し、中国人の「排外意識」の現れであるとするのは、その思考パタ

一のなせる業^{わざ}である。

「5・19事件」の真の意味がいかなるものかは、なお中国内外での研究に値する問題である。だが、間違いなく、この作品から近代化への急激な転換にきしむ中国社会の素顔をうかがうことができるようだ。

「5・19長鏡頭」に使われている言葉について一言。この作品の特徴は内容の新しさと共にその用いる言葉の新鮮さ、通俗さにあり、その故に登場する人物、事件が臨場感を持って伝わってくる。作品に多く用いられている北京方言、現在の北京の流行語がこの作品の大きな特徴となっている。試みに数えてみると、北京方言が延べ90カ所に用いられている。方言を用いると、共通語の及び得ない絶妙なニュアンスを醸し出す。

一例を挙げると、「他騎車直奔王府井大街斜対過的正義路（彼は王府井大通りのはす向かいの正義路に向かってまっしぐらに自転車を走らせた）。正義路は主人公とガールフレンドのデートの場である。「斜対過」は方位を示す北京方言で、「対過（向かい）」に「斜」を冠し、斜め向かいを示

す。共通語ならばくどくどと説明すべき所を一語でしめくくっている。

他にも作者は臨機応変に方言を駆使し、いきいきとした文章にしている。さらにさすが文字でこそ記されていないが、原文では「×××」と2箇所にあるのは「臭大糞」と推定される。直訳すれば「臭い人糞」とでも訳せようが、これは北京の若者の間で流行している「罵人話」で、「無能」「無用と思われる」「実に嫌な」或いは「失敗した奴」などを意味する。サッカー試合で中国チームが敗れ大観衆の罵倒を受けたが、その敗北の事実が「臭大糞！」である。無能な中国チームの態度も観衆の目には「臭大糞」である。新名詞は他にも多い。「残廢（かたわ）」は背の低い人を揶揄する言葉で、「倒爷」は経済政策推進の過程で利ザヤ稼ぎ行為によってボロ儲けした人々に与えられた美称である。「倒」は転売行為によって利益を得ることで、明らかに否定的な意味をもった言葉なのだが、これに尊称の「爷（だんな）」を加えた所に今日の北京市民の複雑な、だがユーモラスな心情が反映されているようだ。

●38年間、総計3万頁を超える一大文献の総目録

アジア経済旬報総目録

(1947-1985)

1985年3月、1326号をもって終刊となった『アジア経済旬報』の唯一の総目録（執筆者索引付き）。戦後の日中関係史を見る上で必携。

* 中国研究所創立40周年記念事業の一環として特別刊行

● B5判・上製250頁
定価 8,000円

(〒300円)

5・19の望遠レンズ

劉 心武
(訳) 桜庭ゆみ子

1985年5月19日、まもなく真夜中になろうという時のことである。ロイター社北京駐在記者アントニー・バックはハンカチをとり出すのももどかし気に額の汗をぬぐうと、テレタイプに飛びつき、その晩、中国対香港のサッカーゲーム終了後に発生した「暴動」のニュースを先を争って打ちだした。この速報の中で、彼は中国チームの予想外の失態に怒り狂ったサッカーファンの一団に車を取り囲まれるという、自ら味わったスリルある場面を大きく取り上げ、次のように報道している。「一人のファンが『どっちがいいんだ。中国か、香港か。まちがったら承知しないぞ！』と大声で私につめ寄ってきた」。……彼はさらに次のように続けている。「今回の騒ぎの主は若者達であり、彼らは車を打ちこわし始め、大声で『外人だ外人だ』と叫んでいる」。5・19のような突発事件は、第一報が往往にして最も権威あるものとなるのである。

2日目の5月20日、香港の各新聞は続々と第一面にこの事件を報道した。いくつかの新聞はアントニー・バックが率先して強調する、中国人のいわゆる「排外意識」をきわだたせている。『東方時報』はその晩の状況を次のように描写した。

「1000人にのぼるかと思われるサッカーファンが北京工人体育场付近の街道に集まり、声高に排外的スローガンを叫びながら、外国人の車を押し止めると車内の外国人を襲撃した」。同じ日、台湾の国民党中央社は香港発の通信で、小気味よき気に香港のあるサッカーファンの言葉を引用した後、次のように報じている。「彼らは……昨晚、中共がゲームに負けた後、北京で発生した排外暴行事件に

対し驚愕している。……彼らは、中共が心理的に香港チームに敗北したことを認めることができず、それが今回の暴動を引き起こしていることに気づいている。このため、彼らの香港の前途に対する憂慮もさらに深まったといえる」

実のところ、サッカーブームによって引き起こされた軌道はずれの行為は、ここ数年来北京で幾度となく起こっているのである。たとえば1981年10月18日、中国対クウェート戦で中国チームが3対0で勝った時に、ファンのある者が外国人乗用車にちょっかいをかけた一件。また同年11月12日、中国チームがサウジアラビアに勝ちをあげた際に、一部のファンが天安門広場に繰り出して、立ち往生しているバスの屋根にはい上がって踊り狂ったり、さらにバスから乗用車に飛び移ったりして、この2台の車の屋根をペシャンコにした一件。1983年7月1日、対西独マンハイム戦で負けを喫した時に、ファンの一部が相手チームのベンチに向かって物を投げつけた上、場外で外国人の乗っている車の通行妨害をしたという件など。

ところが、1985年の「5・19」事件に対しては、香港や海外筋がその翌日に大いなる驚きを表明したばかりでなく、わが国自身、これがかつてなかったほど深刻に受け止めたのである。5月20日、新華社通信は一部の「公益を損なう害虫」による体育場内での狼藉や、場外での公共施設に対する故意の破損等の悪質行為をあげつらったあと、「さらに悪質なのは、少数の者が工人体育场付近で故意に外国人の車をさえぎり、好き勝手にののしったことで……」と、強い論調で非難している。さらに関係部門の首脳陣の以下のような指摘も伝えている。「北京工人体育场で発生した事態は、建国以来、北京で行われたスポーツ競技会中に起こった最も深刻な、かつ国の品位を損なう事件であり、この種の愚味、野蛮な行為は首都北京に全くふさわしくないものである。北京市の政法部門は法律に基づいて当事者を厳重に処罰すべきであ

る」

アントニー・バックは目をさましてから、有頂天になったかどうかはわからない。とにかく我々は、彼ができるだけ客観的で公正に報道しようとしたと信ずるべきであろう。しかし、少なくとも1カ所、バック氏の報道には真実でない部分がある。氏は、サッカーファンがスタンドからフィールドにトマトを投げつけたと言っている。しかし事件後の中国側関係者の細かい統計によると、収容人員8万人のスタンドからフィールドに投げこまれた物品は、ジュースのビニール容器2995本、ジュース瓶156本、パン143個、半かけのレンガ13個、リンゴ15個であった。その日、北京でのトマトの定価は、500gで1元をこえる高値で、しかも品不足のために買い求めるのが困難であったのだ。

サッカーファンが場内に入り始めると、公安部門ではさっそく問題ある者の拘留を開始した。ゲーム中に拘留した者30数名、後の場外の大混乱の中でさらに90名ほど拘留しており、5月20日新華社による正式発表では、「公安部門は現場で127名の関係者を拘留した」となっている。

5月19日、滑志明はもともとサッカーの試合を見に行こうと決めていたわけではなかった。前日の午後は、大変愉快的気分だった。午前中にはその日のノルマを終え、午後、工場をぶらりとひとまわりすると、作業場の主任にあいさつし、さっさと早退を決めたのだ。主任は初めの頃はきつくとがめだてしたが、この若者が短気でケンカっぱやいことを知ってからは、黙認するようになってしまっていた。

さて彼は、自転車にまたがるとアッという間に工場を出て、一直線に銭湯へと駆けこんだ。工場にはシャワー室があるのだが、時間を繰り上げて行って口うるさい閑人ひまじんに後ろ指をさされるのはごめんだった。一風呂あびてさっぱりすると、前も

って用意してきた服一式をズック地の鞆から取り出し、着替えた。風呂屋を出ると、王府井大通りのはす向かいの正義路に向かって、まっしぐらに自転車を走らせた。正義路は北京市内で最も早く緑化された並木道である。路の中心には緑地帯が走り喬木・灌木と草地といったものが、両端の通路の相まって、快適な街並みをつくりだしていた。滑志明はそこでガールフレンドを待った。待ち合わせの時刻の午後6時にはまだ早すぎて、5時を5分まわったばかりだった。

滑志明は今年26歳、この年になっても、まだ一人で散歩というものをしたことがなかった。勿論道を歩くことはできる。が、散歩となるとまるでわかっていない。相手がまだ来ないのだから、自転車を引くなり、また、鍵をかけておくなりして散歩でもすればよさそうなものだが、彼にはできない。自転車をその辺にたてかけると、適当なベンチを探しだして座りこみ、タバコを取り出して一本また一本と吸いだした。

正義路の並木道には、前の年、国慶節をむかえる時に3つの像が設置された。「街のそうじ」と名づけられ、清掃婦を型どった像は、3つにうち割られていた。また、「音あわせ」と銘名された琴をひく女の子の像の方は、中指がへし折られた上に赤のボールペンで額に印がつけられ、首には首飾りが落書きされていた。「学習」という題の読書する娘の像といえば、唇が真赤に塗られていた。滑志明は、この醜くなってしまった文学小女の近くに腰を下ろしたが、周囲の風景を仔細に観察するでもなかったから、この娘が純心無垢であるかどうかなんてことには、全く気づかなかった。ただひたすらガールフレンドの小瑛子を待っていたのである。

彼は小瑛子と3カ月前に映画館で知りあったのだ。2人が恋人同士となってからというもの、彼女の前ではいつもプレイボーイのごとくふるまっていたが、内心、自分のような者には「恋愛」に

しろ「紹介」にしろ、相手を見つけるのがえらく難しいのは百も承知だった。たとえば、「5・19事件」の前の週、5月13日付『北京科学技術報』の「相手探し」欄にでも目を走らせてみれば、次のような典型的な募集広告をみることができる。

「26歳，未婚女性，身長161cm，大学卒業，本市某研究所で技術関係の仕事につき，容姿端麗，健康かつ善良。30歳以下で本市就業，大学・高等専門学校卒，明朗で品行方正，170cm以上の未婚男性を求む」。他のことはさておき，160cmそこそこの娘が，170cm以上の男性でなければ嫁がぬというのであるから，滑志明のような165cmの者が，「半片輪者」とからかわれるのも無理はなかった。この「片輪」が，ウンと強気を出して，探し出した相手が，見れば見るほど可愛い小瑛子なのだ。小瑛子だって161cmだし，「容姿端麗，健康かつ善良」であるが，彼女は背たけも学歴も問題にしないではないか……。

あきれたことに滑志明といたら，こんな風に座ったきりタバコをすって，たっぷり30分，ぼんやり待っていた。彼だって考えることはできたが，それはあてどもなくまとまりがなかった。小瑛子は約束より10分程早くやって来た。二人ともわざと遅れるとか，きどった言葉で相手の嫉妬心をあおったりするといった恋の手管とは全く無縁で，おとなしく，正直につき合っていた。もっともこの日は，二人の心の中にもっと深い意識がおこってきてはいた。つまりそれは，結婚を前提とした交際をしているというものであった。

小瑛子はこの日いつもより念入りに化粧をしていたが，滑志明はちっとも気づかなかった。彼女の方は滑志明が目新しい薄茶の「サファリ式」背広を身につけ，淡いブルーのワイシャツに金と茶のしまのネクタイといういで立ちであることをしっかり見ていた。小瑛子がうれしそうに滑志明の首にしがみつくと，ほのかなミルク臭が滑志明の鼻をついた。彼女は乳製品会社の瓶洗い工をして

いるので，いくら髪や顔，体に違った香りの化粧品をつけても，全身からはミルクの匂いが発するのであった。

滑志明はこの香りが好きだったが，相手にそう告げたことはなかった。胸の奥底の微妙な心の動きを表現するなどといったことは不得手なのだ。それは彼が愚かであるからかもしれないが，しかし，そうだからといって，この若者の内面に美しい詩情がないとは言えないだろう。

二人は一緒に自転車を押しながら正義路を出ると，前門東大通り南側の「レストラン松竹」で食事をした。滑志明は例のごとくテーブルいっぱいのメニューを注文しようとしたが，小瑛子に止められた。つまり，彼女は「あなたのサイフ」を「私達のサイフ」とみなし始めたというわけだ。滑志明は，ただなんとなく「可愛いヤツだ」と思っただけだが。二人がそろって自転車で滑志明の家に向かう時に，初めて滑志明は相手に「今晚楽しませてやるよ，ビデオがあるんだ」と告げた。

滑志明の父親はこの日，仕事場から帰宅するとさっそくこの目障りな物を見つけ，「テレビの上のあれはなんだ。どこからもってきた」と，台所で食事の支度をしている妻に声高に聞いた。

連れがすぐカッとくる性質なのを知りつくしている滑志明の母親は，慌てて台所から飛び出してきた。そして手に油の瓶を持ったまま，早口に一気にまくしたてた。

「昼に志明が持ち込んだんですよ，なんでも中学時代の同級生の小猛子から借りたとか。小猛子の父親は仕事で日本に行って何年にもなるでしょう。これをもって帰ってきたんですよ。ビデオの機械だとか。あたしも，こんな物，借りてくるんじゃないよ，壊しでもしたら大変だよって言ったんですけどね。でもあの子ったら……」

「なんてことだ。ますますなっとらん。甘やかすのもほどほどにしろ」

滑志明の父親はカッとになって，荒々しく母親の言

葉をさえぎった。

ちょうどこの時、台所の鍋の油が煮えたぎったので、母親はひとまずその始末にかけ込んでいった。父親の方は買い入れたばかりのイタリア式の人工革ソファに座りこみ、手をブルブルふるわせながらタバコに火をつけた。目下街ではいたるところで、フランス式、ベルギー式、イタリア式などの人工革ソファが売られており、それらは牛乳屋にまで山積みされていた。だからすでにこういうものを見慣れた滑志明の父親にとって、ソファは安心して使えるものなのであった。しかしビデオ装置はまだめずらしく、父親が憎々し気にそのピカピカ光る平たい機器をにらみつける様は、牧場に闖入した怪獣と顔をつきあわせた羊飼いと似た観があった。

人間の思考活動は、いくつかの段階の層に分かれている。最も表面の層では、外界の事物に対して感覚的に好き嫌いの判断が行われる。その次の層では、具体的な功利性を主眼とした一連のもくろみがなされる。そしてさらに奥に進むと、そこでは、個人の経験と集団の一員としての「集団的無意識」とが交錯し化合するのである。

滑声明の思考活動はごく表面の層でなされることが多く、全体としては浅薄なため「浅薄思考」の類に分類される。父親の方は当然これに止まらず、少なくとももう少し深い段階までいく。つまり、各個人が身をおく小社会から社会全体への分析批判へ、具体的な批判からさらに上の純粹理性へ、ふだんの分散した思いつきのものから哲学的水平思考へと、数層にまたがっている。そしてこの思考活動はある層から次の層へ段階的に移り変わるといふより、複雑な情感に転化しながら混ざり合い、立体的におしすすめられていくのである。

滑志明の父親が例のソファに腰かけ、ビデオ装置をにらみつけている時、この思考活動が直ちに立体的に始められたのだ。ビデオ装置の外見と性

能の二重の違和感、以前耳にした、密かにポルノ録画を放映したためにとっつかまった話、「小猛子の父親」のようなインテリの技術幹部の入党、昇進、海外出張、そしてその結果の実益、党・政府幹部としての薄給にひきかえ街の「ヤミ商人」どもの羽振のよさ、対内「活発化」と対外「開放」によってもたらされた混乱と汚染、党員として党中央の方針を擁護する義務と、内心の疑惑との矛盾による苦悩、党中央の政策方針に厳格に沿って行動しているという高尚な自覚的な党性がもたらす神聖な感じ、それから、妻や子供のご思想ですら自分の思い通りにいかないという苦痛……。これら一切が混ざり合って化学反応をおこし、血圧を押しあげ、心理的平衡を失わせて一触即発状態にしていた。したがって、息子がノホホンと、しかもビデオ装置と同じ程度に全く思いがけず、見知らぬ女友達を連れて帰って来ると、目前に展開されたこの事態を前に、一挙に息子の頭上で爆発がおこったのである。

父親と息子の衝突場面は読者のご想像におまかせしよう。母親はこんな場合にはなくてはならぬ潤滑油である。小瑛子は、「おばさん」の顔をたてて、すぐ帰りはしなかったものの、いたく傷ついた。彼女は滑志明がどうして事前に両親に一言いっておかなかったのか理解に苦しんだ。今日が初めての訪問ではないか。父親の息子への叱責は一言もおぼえていなかったが、滑志明が家でこんなにも情けない立場にあるというのは、かなりショックであった。

母親は二人を息子の小部屋に押し入れると、ボタンとドアを閉め、今度は連れ合いの方に全精力をかたむけた。ごはんをすすめ、寝室まで支えて行き休ませ、お茶をついでやり、足洗いの湯をわかし、あいづちを打って息子の愚痴を言い、しまいはそれとなくとりなすところまでこぎつけた。

「志明が相手を見つけたんだってわけよ。ちょっと目にもよさそうじゃない……。あの程度の学歴

と仕事、あれっぼっちの背たけにあの気性で、相手を見つけれただけでもたいしたことじゃない。なんでまた、帰ってくるなりどなりつけたりなんかして……」

滑志明と小瑛子は小部屋で向かい合って座っていた。滑志明は黙りこくってタバコをふかすばかりだった。小瑛子の方は、海賊版でひどい印刷の『冰川天女伝』をパラパラでたらめにめくっていた。滑志明は心のわだかまりをどう表現したらよいかも、小瑛子に対してきちんと説明すべきだということもわかっていなかった。そしてこんな状態のままで小瑛子は帰っていったのだった。ほのかなミルク臭が完全に消えてしまってから、初めて滑志明は、次のデートの約束をしていなかったことに気付いた。

滑家の階は暫し静けさにつつまれた。母親はいつもなら毎晩必ずテレビをみるのだが、今夜はとりやめである。9時を少しまわると、滑志明はボサボサ頭でノソッと部屋を出て、テレビのおいてある居間にやってきた。彼はうさ晴らしにビデオを見ることに決めた。一人でビデオをいじるのはこれがはじめてだった。どうスイッチを入れたものやら、小猛子から借りた香港アクションテープをどの様に入れてみても、テレビの画面は相変わらず真白のまま。「チェッ、だましやがって」彼は小猛子をののしると、ビデオをあきらめた。そしてさっさと寝てしまった。不眠症にかかるなんてことはないのである。

あくる日、つまり生涯忘れることのできない日となった5月19日、滑志明は夜が明けるや小猛子の家に行き、ビデオ装置を返した。まず小猛子をあくどいとせめたのはいうまでもない。ところが小猛子の方は、機械オンチの彼がスイッチを押しまちがえて、録画してあったものを消してしまっただけと決めこみ、彼以上に怒り狂った。その録画テープは小猛子が他人から借りていたものだったのだ。滑志明は唾然としてしまった。あの時、どのスイッチを

押したのかまるでおぼえていなかったから、弁解しようもなかった。なんという運の悪さ、全くついていない。しかし小猛子に八つ当たりするかわりに、「弁償するよ、いくらだっ？」と尋ねた。値段が150元であると知ってすぐさま家に帰り、自分の部屋から180元を取り出すと、再び小猛子の家にまい戻った。そしてポンと150元を手渡したのである。その後ポケットに残りの30元を入れると、家には帰らず、自転車で市内へとのり出して行った。

はたからみれば、彼が胸にたまった忿懣をどこかにはき出したい気分であることは明らかであるが、滑志明自身はそれをはっきり自覚していたわけではなかった。ただ家に帰りたくないと思っただけである。小瑛子の家がどこにあるか知っていたが、まだ門をくぐったことがなかったので、今無理におしにかけていこうとも思わなかった。(小瑛子は、今度の土曜の晩、彼を連れて行くといっていたのだが)彼はこの日曜日をなんとかやりすごして、月曜日に小瑛子の仕事場に電話を入れることに決めた。前にも言ったように、彼は自然を鑑賞することなどできなかったから、一人では公園に行く気もおこらなかった。

ちょうど中国美術館では数種の美術展覧会が同時開催されていた。彼は門の前の路を通り過ぎたが、入口の宣伝で何が展覧されているかを注意してみようとすらしなかった。ちょっとダンスでもしてみたかったが(それもほんのちょっとだけ。チビの自分では、スラリとした長身の者のようにかっこいいはずがなかったから)。しかしどこにダンスホールがあるのかわからなかった。以前は食堂に入って、テーブルいっぱい山ほど料理を注文してビールを2ℓ飲んだ後、その半分も食わずに悠然と立ち去るのが、彼の気晴らしの一つでもあった。しかし小瑛子と知り合ってから、こんな気晴らしは何とも味気ないものになっていた。あとは映画でも見に行くしかなかった。アメ

リカのシネラマ『槍手哈特（原名不明）』は2回見たので、もう見る気はしない。国産の『代号213』は3角(0.3元)を払ってまでして見ようとは思わなかった。どこかでテレビゲームでもしたい気がしたが、ゲームは中山公園にしかなかった。もう東単まで来てしまったので、再び西に逆戻りするのめんどろうだった。街はこんなににぎやかなくせに、滑志明にスカッと晴らしをさせてくれる場所ひとつないのである！

彼は自転車でなんとなく建国門を通り過ぎた。そして国際クラブ、友誼商店を通り、建国飯店と京倫飯店にさしかかった時、滑志明の頭の中で、漠然とながらも思考活動が始められた。これらの場所には、自分のような中国人は入れないのだ。外貨兌換券が思い浮かぶと、数日前、小瑛子と西単のデパートの地下をぶらついてた時のことが思い出されてきた。そこには外貨兌換券専用のカウンターがあった。二人は地下におりるエレベーターのところで、兌換券引き替えを専門にやる「ヤミ屋」に出くわしたのだ。その男はあごが細くどがっており、背たけはゆうに1 m 70 cmはあった。二人を見ると目くばせをして、手まねで兌換券と人民幣の差額を示した。彼は相手にせず、小瑛子を連れてエレベーターに乗ったのだった。階下の特別売場では見聞は広まったものの、残念ながら購買力がなかった……。それから、テレビでみた長城飯店のこと、続いて小猛子の話がうかんできた。「広州では金さえ持っていれば、どこでも入れてくれる」。このことから、たまたま他人の持っていた『羊城晚報』の「中国大酒店出血大サービス、張徳蘭歌唱会……同時に霹靂舞^{ダンスチーム}舞踏団の助演、歌よし踊りよし、多彩なプログラムで、お一人様¥25から¥30……」という広告を目にした時のことがうかんできた。あの時誰かがこの羊の角(¥)が何なのか説明してくれたのだが、今でもさっぱりわからなかった……。もっともこの特権地区を過ぎてしまえば、もうこのような連想をすること

もなかった。

大北窯付近にさしかかると、通りの両側一帯に個人の屋台がはり出していた。このため、各駅バス路線は慌ただしく行きかう人でいっぱいとなってしまうていた。どこでどうまちがえたのか、自転車の前輪が40～50歳程の男性にぶつかってしまった。この男、さっと顔をねじ向けると、「少し礼儀をわきまえたらどうかね」と憎々し気に言い放った。滑志明はこの男とやり合う気など毛頭なかったから、自転車からおとなしくおりた。しかし、わびを入れるわけでもなく、かといってぶつくさ言うわけでもなかった。やり返さないことが非を認めたことの表示というわけだ。今度は誰かの自転車の前輪が彼の後輪にぶつかってきた。本能的に頭を振り向けると、やみくもにそちらをにらみつけ、「どこに目をつけてるんだ」とどなった。向こうはほぼ同年代の若者で、両者はすぐ言い争いをおぼじめた。一言ごとにエスカレートしていったが、大ゲンカにまでは至らなかった。滑志明は、その時仲裁がはいったかどうか、また、何を言い合ったのかもおぼえていなかった。が、道を曲がって三環路に出た時、最悪の気分であったことは確かである。

イギリスの『デイリー・ミラー』紙は5月21日に、「5・19」北京の「サッカー暴動」に焦点をあてた評論「乱れとぶブロックレンガ」を発表し、「これらのサッカーファンは、60年代の中国文化大革命で過激な行動を行った紅衛兵のうち、失望を感じた者の一部では？」と推し測るような論調で見解を述べている。これは一つの代表的な予測である。

そこで今一言いっておく必要がある。 「文化大革命」は1966年に突発し、そのうち大々的に過激な行動が横行したのは最初の3年間であった。当時の紅衛兵の中心は高校生から大学生、17歳から23歳前後の者だから、1985年には、彼らは36歳

から41歳になっているはずである。しかし「5・19事件」で拘留された127名の「攪乱分子」は、最年長の者で35歳、しかも30歳を越えた者は数人しかおらず、大部分は15歳から25歳前後の若者だった。彼らは「文化大革命」が始まった時まだ生まれていなかったか、あるいはごく幼なかったかであり、「60年代……過激な行動に走った紅衛兵で失望を感じた者の一部」では決してありえない。

国内では、「5・19事件」に対する主観的な臆測が密かに取り沙汰されるようになった。それはまず北京で始まったが、面白いことにサッカーとはまるで縁がなく、球場に足さえふみ入れたことのない中・高年層の人々の間でより多くささやかれた。彼らの中には国家の幹部もかなりいた。「価格調整と関係があるのでは？」。というのが彼らの意見である。

日から北京市では幾つかの副食品に対し、価格の引き上げが行われている。これは当然すべての消費者にとって心理的な打撃であったが、しかし、この打撃の程度は大方年齢と反比例しているといえる。「5・19事件」で拘留された127人のうち、既婚者はわずか数人にすぎず、絶対多数はまだ相手もいないか、恋愛の恋の字も知らぬ者かである。彼らのほとんどは経済的に独立しておらず、多くの者は肉や魚、野菜を買いに行ったことすらない。仕事についている者も、給料は低く、奨励金も高いとは言えないが、普通は両親のもとで食、住が保証されているため、小遣いにはこと欠かない。そして彼らの消費習慣は前世代とは大いに違って、買物の基準は品物が安いかな否かではなく、可愛いかな否かなのだ。つまり「5・19事件」の突発要因には、現行の物価政策への反動という政治的色彩が含まれることを立証する説得力ある例は、みづかりそうもないのだ。

滑志明はその晩、工人体育场に行ってサッカー

ゲームを観戦した。もともと球技をみるのが好きだったから、これは全くの偶然というわけでもない。今回の第10回ワールドカップアジア地区予戦、東区第2ブロック第1トーナメントで、いつものように夢中になって切符を手に入れようとしなかったのは、一つには、彼には今や小瑛子がおおり、しかも彼女は球技に興味がないこと。二つめには、今回の組み合わせをみれば、中国チームはやすやすと次のブロックに進めるだろうから、とりたてて見る価値もないと思ったことがあった。そうはいても、光華路の「レストラン鳳凰」で食事をしたあと、ペダルを踏んで工人体育场にかけつけ1枚6角の入場券を2元のヤミ値で買い取ることができた時には、心中かなり愉快だった。中国チームは香港チームと最低引き分けさえすれば次のブロック進出はまちがいないかつ、第一香港チームはこれまで中国チームに勝ったことがなかったではないか。今宵、天の時、地の利、人の和を得ている中国チームが香港チームのゴールに一気に攻め入らない道理はない。滑志明は熱気のムンムンするスタンドに入りこむと腰を落ちつけた。近くや遠くのスタンド上に、ファンが自作の横長のたれ幕をひろげているのがみえた。「必勝中国！ メキシコへ進軍！」といったのや「天津ファン、助太刀に北京入り」とか、「古仔ガンバレ！ ゴール」(ちょっと考えてから、ようやく「古仔」が古広明をさしているのだとわかった)。突然、場内の雰囲気さらに盛り上がった。セカンドスタンドあたりで、誰かが「中国・香港、2：0」と書いた自作のたれ幕をはったのだ……。なんだか随分胸がスッキリしてきた感じだった。あとは中国チームがフィールドに姿をみせ、一球一球ボールを相手のゴールにたたきこんで、自分にかわってうっぶん晴らしをしてくれるのを待っていればよいのだ……。

滑志明の右脇に座っていたのは、ごま塩頭のサッカー狂、正真正銘のサッカーファンであった。

ファンとして本物かどうかの基準は、毎試合球場に応援に出かけていくことにあるのではなく、愛するメンバーの訓練を見に時々竜潭湖畔の中国チーム練習グラウンドに出かけていくか否かにあるのだ。隣のこの先生も、ひまさえあれば練習グラウンドに行く手合だ。このようなウルトラ級サッカー狂は北京におよそ200～300人はいた。彼らは中国チームがやってくるのを待っているのではなく、こちらから出かけて行って練習場の金網の外に集まり、チームが練習を始めるとじっと目を凝らし、心ゆくまで眺めて楽しむのだ。時にはメンバーが練習を終えて立ち去り、グラウンドが空になっても、まだ金網の外で、さかんに議論に花を咲かせた。彼らの心情は、ちょうど進級試験を前にした子供をもつ両親が目玉焼きを2つ作ってやろうかとか、健康食品の花粉入りウエハースを食べさせねばなどと気を配り、子供が試験に備えて復習するのをじっと見守ることに、一種のなぐさめや楽しみを見い出すのに似ていた。

5・19のこの日、この手のサッカーファンが全員そろったのは言うまでもない。滑志明の右隣のこの先生、ミニトランジスタラジオ、高倍率望遠鏡、自動折りたたみ傘と最新版『サッカー』マガジンと完璧ないでたちで、ゲームが始まってからというもの、終始、見ながら、聞きながら、同時にしゃべる大忙しぶりである。

滑志明の左隣は、見たところ中学生らしかった。しかし落ちつかないことこのうえなく、はっきりなしに立ち上がるか、座っていても、ユラユラ左右に体をゆするかしていた。もっとも、気前よく折りたたみ式望遠鏡を滑志明に貸してくれ、自分は派出なおもちゃのラッパを手を持って、ホッペタをふくらませては「プァー、プァー」と中国チームに声援を送るところなど、なかなか可愛気があったが。滑志明の手前の若者は、2羽のハトをハンカチでくるんでいた。中国チームが勝ちどきをあげた時に、ハトを放って祝おうと待ち

かまえていたのだった。

ゲーム進行中、滑志明はとりたてて目立った行動をしたわけではない。ただ荒れ狂う潮流に一滴の水をたらしたほどのことをしたまでだ。フィールドに出現した状況は、ますますサッカーファンの思いもかけぬ方向に展開していき、その心理的落差がこれまでのどの試合にもまして熱狂じみた「集団的無意識」をかもし出してきた。喚声は一時としてやまず、誰が指揮するわけでもないのに、数万人が一斉に足をふみならし始めた。試合開始の18分、香港チームがペナルティーキックにより1点を取ると、台風の眼が通りかかったかのように、狂乱の浪は一瞬奇妙にも鳴りをひそめた。しかし32分、中国チームが1点を奪い返すと、ドッとわく歓声で場内はこれまでにまして騒然となった。AP支局は翌日の報道に「香港チームがボールをキープするや、中国側にラフプレーがあらわれ、スタンドはサッカーファンの叫び声でいっぱいとなった」と解説している。当時、興奮するサッカーファンやグラウンドわきのコーチ、フィールド内のメンバーばかりでなく、場内の秩序整備にあたっていた民警すら、なにがなんでも勝たねばならぬという心理に陥っていた。それは中国チームの敗北を許さぬばかりか、引き分けもだめ、必ずや大勝利、しかも即刻、というものだった。こんなわけだから、香港チームのメンバーが一時にしろボールをキープすれば、それが大変な屈辱に感じられるのであった。この様な心理状態が形成されたのは、わが国が、これまでスポーツ競技の報道で、過度に「国家主義」を打ちだしていたことと関係する。勝利、新記録樹立は「民族の誇りを高め」、敗退、成績不振ははっきりとは言わぬまでも、「国辱」になってしまう。朱建華がオリンピックスタジアムでバーと向かいあっていた時、心におし被さっていたのは、正にこの重い負担だったといえる。テレビの画面をじっと見つめて彼の跳躍を待つ数千万の同胞の、国のメ

ンツをつぶしてくれるなという思いが、彼に実力を発揮させなかったのだ。

「5・19」事件では、8万の観衆と中国チームのこの様な「集団的無意識」への心理的傾斜が、状況をますます中国側に不利なものにしていった。後半の60分、香港側が2度目の得点をあげると、試合終了後の勝利の乱痴気騒ぎを今か今かと待ちかまえていたサッカーファンは、突如として平静さを失い、球場全体が燃え上がる油の様に騒然となってしまった。折り悪しく通り雨に見舞われ、傘を持っていなかったファンの一部は、いまいまして屋根のあるスタンド上方へと移ったが、大多数の者は怒り狂ったまま濡れるままになっていた。興奮のあまりもろ膚脱ぎになり、目を真赤に充血させて雨の中を叫び、走りまわる者まで現われた。最後の15分間、中国チームは乱れに乱れ、全く挽回の余地がないまま、1対2の敗北を迎えるにいたった。試合終了が告げられた瞬間、すべての観衆は一斉に立ち上がり、そしてそのまま立ちつくしてしまった。滑志明の右隣のサッカー狂は、もう顔中涙、涙。左の中学生はとっくにラップをペチャンコにしてしまっていた。前の若者は、怒りのあまりハトの尾をへし折るとやおら投げ放った。哀れなハトは血をしたたらせながら飛び去り、散った羽毛が滑志明の顔にまでかかった。この時、たくさんのジュースのビニール容器が彼らの頭上を飛びこえ、フィールド内に投げ入れられた。

香港チームの方は、外地にいるということも忘れて勝利に酔いしれていた。中国チームはゲームセット後、握手をしに行くどころではなかったが（このような細かいことが、幾つかの外国通信で特に強調された）、香港チームも当時、握手するという当然のマナーに気付く余裕もなかったといえる。汗と涙にまみれたメンバーは、飛びつき抱き合い、それからフィールド内にどっとくりこんできたチームメイトや随行員、記者等と我を忘れ

て勝利を喜び合ったのだ。何度も並び方を変えては写真をとり、そのたびにフラッシュが閃光を放った。これらの一つ一つが、数万人の観衆の心を逆なでした。今やスタンドにたくわえられた怒りのエネルギーが放出されようとしていた。それはまさに大きくうねる高波がどっとおしよせようとするかのようであった。

数万人の感情の波は、幾つかの方向に分かれて流れていった。前に述べた「正真正銘のサッカーファン」を中心とする一群は、中国チームの退場門へと向かった。これは悲愴感あふれる一隊で、主導者の数人は、すでに小鬢が真白になっていたとかいう話も伝わっている。彼らは阻止しようとする警官に向かって、中国チームの曾雪麟コーチを出して質問に答えるよう、嗚咽まじりに頼みこんだ。この流れの中心は、礼儀をわきまえた純粋なサッカーファンであったが、とりまきの野次馬になる程、分別がつかなくなっていく。彼らは民警が先頭を退場させようとするのを見ると、おとなしく言いなりになることへの反感が生まれ、（自分たちの心情は正当なものだし、先頭の者は正義のために突撃する勇士なのだから、）「オーオー」と騒ぎ声をたてだした。中国チームが退場する時には、無数のジュースのビニール容器がメンバーめがけて投げつけられていたが、この時も、幾人かの熱狂者が、メンバーが弁解に出てきたと勘違いして、物を放りつけた。誰に音頭をとられるでもなく、群衆心理に陥った人々は、中国チームの「×××」、曾雪麟の「×××」など聞くに堪えぬ言葉を叫んでは、うっぷんを晴らし始めた。また、前後の見境いをなくした別の一群は、主に香港チームの上に怒りをはき出した。

香港チームは、芝生で狂喜したあと退場しようという時になって初めて、「飛び矢」にぐるりと回まれていることに気が付いた。そこでメンバーの警備員は、主席シートのわきに通じる出口へと彼らを導いた。彼らはいつのまに

か手に手に1本ずつ傘を持ち、これを盾にして2度までも包囲陣をつき破り、やっどのおもいで休憩室へバラバラとかけこんだのだった。主席シート後方の17, 18, 19列の客席切符は、サッカーファンが自由にも買えるものではなく、ここに入れるのは「党組織関係の者」だけであったから、警備員は、主席シート横なら「飛び矢」をさけることができるはずだと考えたのだ。ところが、この日唯一の「流血事件」が皮肉にもここで発生してしまった。17列スタンド席から投げつけられた1本のジュース瓶が運悪く香港チームの張家平にあたってしまったのだ。彼はそれを手でさえぎった。その結果、唇と手の指が破片で裂けてしまった。心理的な圧力も、現場で秩序維持にあっていた民警へ正面切って加えられた。民警達にしろ、勝利の狂乱騒ぎで生じる事態にあたるつもりが、試合終了後に出くわしたのが惨敗による怒りの波とは全く思いもかけず、このため群衆を散らす仕事は更に難しくなっていた。胸のうちに火種をかかえ、煙をくすぶらせていたサッカーファンは、場外へどっと繰り出すと同時に、警官ともこぜり合いを起こした。こうしてまず、理性を失ったファンによって、体育場出口わきのガラスが割られるという事態が起きた。

「5・19事件」は単純かつ複雑、複雑かつ単純である。単純なのは、この事が国家、民族、政治、道徳にかかわりなく、人類共通のゲームにおける熱狂の大発作だということ。複雑なのは、この事件にはわが中国民族特有の心理的沈澱、ここ30年の政治的、経済的変動の心理的な投影、「文化大革命」によって産み出された世代の驚くべき教養の低さ、中国社会に息抜きの場が不足していること、開放政策によって引き出された個性解放の動きと、それに対する不十分な分析による単純化、反動化等の各要素がいろいろに混ざり合っていることである。

滑志明は自分でもそれと気づかずに叫び猛りつつ、一種の興奮状態で人浪にもまれながら体育場の外に出たが、夜風にさっと顔面を吹きつけられて、この興奮からやや醒めた。あたりのガラスを打ち割る音や、警官の走り寄る足音が耳に響いた。ちょっと意外でもあり奇妙でもあったのが、体育場の北門あたりから流れてくる高らかな歌声だった。それは「インターナショナル」であり、そして「我們工人有力量（力ある我ら労働者）」でもあった。

滑志明はその調子はずれの高ぶった歌声を聞くと、急に心にたまっていくさくさしたものが、車輪がめぐるように次々と思ひ浮かんできた。ビデオテープ、150元、小猛子の面構え、父親の目付、小瑛子のいたたまれない様子、ああそうだ、小瑛子、昨日は白の水滴型のイヤリングしてたじゃねェか、白…白い牛乳、あわいミルク臭。ああ、なんで俺ばかり損な目に会うんだ。目の前に再び球場での中国チームの醜態が浮かんできた。李華均と趙達裕、馬鹿の一つ覚えで、ロングパスにシュートばかりやりやがって、「古仔」の黄金の脚はどこにいっちゃったんだ。さっきの香港のやつらのうれしやがり様ったら、やつらきっと外貨兌換券を持ってるにちがいねェ。西単百貨店のとんがりあごのヤミ屋。建国飯店や京倫飯店には、おれ達は入れねェんだ。ガラス窓からぼんやり見えた豪華なシャンデリアやきらびやかな食卓、すその大きくあいた旗袍（チャイナドレス）のウエイトレス。彼はためしに自分と小瑛子をガラスの向こう側においてみたが、またいまいまし気に空想をうち消した。こんな調子で知らぬ間に工人体育場の鉄の柵をぬけ出ると、呆けた様に通りを横切り、北三里屯のT字路にさしかかった……。

「5・19事件」は一体「排外暴乱事件」なのかどうか？ サッカーファンの香港チームに対する「飛び矢攻撃」は、香港問題の前途をよぎる陰気

な影を予告しているのではないか。また、香港の『信報』が今回の事件を「義和団精神の表われ」とするのは妥当かどうか。

「5・19事件」では、確かに香港人と外国人に対する攻撃が行われている。ある外国大使館員は、「車に乗り込んだあとは、暴走の群れにひきずり出され打ち殺されるか、エンジンをふかし思いきって人ごみにつっ込み、むこうをひき殺すかの瀬戸際に追いこまれた感じだった」と述べている。この外人は後者を選んだところ、群衆はさっと身をおかし、双方とも無事であった。また別の中国駐在記者は、妨害されて侮辱を受けただけでなく、一緒に乗っていた幼い娘までも荒っぽいおどしにあったと語っている。数名の駐在員は、外交部に抗議を申し入れている。しかし最終的な統計によると、外国人、または香港人の乗用車で、ひっくり返されたり、発進機能を損なわれたものは一台もなかった。程度の違いにかかわらず、防風ガラスを割られたり、車体を傷つけられたり、あるいは表面をはがされたり、つばで汚されたりした車は、少なく見積って9台、多く見積もれば25台だった。

うつぶんのはけ口となった物の大部分は、実際には「純粋国産品」だった。工人体育場入口沿いの通りにおかれた数十個のゴミ箱がすべてひっくり返され（もっとも、おこせばもと通り使えたが）、交通整理用のボックスが一つ、その防風ガラスを割られている。また体育場の外で、観客の散るのを待っていたバス数十台の窓ガラスが壊された。中心地点の体育場のガラス窓を割られた以外、攻撃波の半径は、少なくとも1kmを越える二環路上の地下鉄東四十条駅まで及び、その窓ガラスも被害にあっていた。民警が現場で足並みの乱れた群衆を整備し、騒ぎの当事者達をつかまえている時、小ぜり合いの最中に警官になぐりかかる者もいた。しかしファンの中にも警官の中にも、病院で手当を受ける必要が出た者は一人もいなかった。香港

チームの英雄張家平がガラスの破片で口唇と指を切った以外は、外国人、または香港、マカオの同胞でケガをした者は皆無だった。張家平の傷にしる、赤チンを塗った程度で、特にこれといった複雑な治療は必要なかった様である。

うわさでは、一人の外国人の年寄りが、目の前の事態に仰天して気を失ったそうだ。この方には当然、国をあげておわびすべきであろう。しかし、翌日以降、中国人自身がこの事件に対して行った（政治的）検討は、多くの中国人、まずは青年に、言葉では言い表わし難い心理的重圧を与えたのである。

ある職場では、その晩この試合を見に行った者を残らず登録させたという。ゲームを見たにしろ見ないにしろ、今回の事件をきっかけにおこった教育運動に各自が必ず加わり、会議の席でみずからの態度を表明し、「公益を損う害虫」を批難することが求められ、その上各自が規律を遵守することを誓わせられたともきく。また、今後球技を見るのに、個人で切符を買っての入場ができなくなり、職場の指導者が責任をもって文明的な観衆を選び、そのサインをさらに上の管轄の指導者にまわしていくという形で、組織的に観戦させるという方法がとられることになったという。一言付け加えれば、今回の騒ぎをおこした「公益の害虫」に対し、嚴重かつ速やかなる処罰がとられるはずであり、そして拘留された127人全員、北京の戸籍が取り消され、青海へ移されるといううわさまで流れた。幸いにも、後から事実が証明する様に、関係者はさすがに、次第に騒ぎを法律的に基づいて理性的に、適切に処理することを会得しはじめてきており、後者の様なかなりショッキングなうわさは単なるうわさで済んだ。

さて、今度もやはり例のロイター記者、バック先生だが、24時間前に先頭切って「排外」という驚きの声をあげたのと同様に、5月20日の晩、またまた誰よりも早く興奮から醒め、先を争って次

の様なニュースを送った。「一人のイギリス外交官は、香港と対立する様な特別な感情があると信じているわけではない。彼は、『誰であろうと、中国人でありさえすれば、ワールドカップに参加できないことに対し、失望を感じるはずだ』と語っている」と。

中国では、拘留された127名の騒ぎの当事者に対し、初めは当然「外国人の乗用車を妨害してちょっかいをかけた」ことを重点に取り調べていたが、しかし一人として、自分がこの様なことをしたと認める者はいなかったし、彼らを拘留した理由もこれではなかった。大多数の者は一本2角のジュースのビニール容器(実際にはビニールチューブというべきだろう)を投げたために、その場をつかまったのだ。フィールドに向かって堅紙を折りたたんでつくった「手裏剣」(つまり紙飛行機のこと)を飛ばしたというだけでつかまった者、または熱狂のあまり最後までワーワー騒いで体育場の外の空地に残っていたためにひっかかったという者もいた。

一日たった5月21日、香港の幾つかの新聞は、比較的冷静な評論を出し始めた。『明報』——「サッカーファンが騒動をおこすのは、世界各地で頻繁におきることであり……この種の騒ぎはその地域の社会全体の精神文化とたいした関係はない。いかなる大都市においても、教養に欠け、精神不安で非理性的な人間はいるものである」『華僑日報』——「サッカーファンの騒ぎは、もともと個人的な感情の爆発によっておこされたもので、モラルやエチケットといったものとは関係がない。もしこの事件が北京市民のイメージを損ったというのであれば、“根拠のないことを大げさにとりあげる”と言わざるを得ない」

消息筋によると、127名の拘留者のうち、バック先生が第一報で描写した「排外暴徒」にあたるのが誰か、確かめるのは実に難しいらしかった。彼らのうち罪状が最も重いとみなされたのは、一

つは援助隊の民警を満載したトラックにむかって石を投げつけた例、もう一つは国内タクシーをひっくり返す行動に加わった例である。しかし、「5・19事件」全体でひっくり返された(側面が上になったのだが)とはっきり調べのついた乗用車は、この一台だけだったのである。

滑志明はとくに、体育場の熱狂した渦の中心から抜け出していた。彼個人の運命としては本来ならば、あのつらい気分を味わうところまでおちぶれずにすんだはずだった。が、皮肉にも、突然彼は自転車を置き忘れてきたことに気づいてしまったのだ。歩いている方向も何かおかしい。ムシャクシャした気持ちはつるばかりだった。折りも折り、例のT字路の入口で、渦の中心から踊り出た狂乱の波が勝手に逆巻いていた。地下で勢いよく流れるマグマが、苦しみながらぶつかりあっている時に偶然適当な噴出口をみつけたかのように、滑志明は本能的に走り寄り、その「悪の渦」へと身を投じたのであった。

その一群はおよそ20~30人前後で、すべて滑志明とほぼ同年代の若者達だった。彼らはそこで、全く面白半分に騒ぎをおこそうと、タクシーが通りかかるごとに一斉に襲いかかり、妨害していたのだ。

事件後、判事に繰り返し尋問されて、滑志明は騒ぎまわっている連中のうち痩せて背の高いのが、「俺達が高い金払ってバカ試合見てるってェ時に、やつら一晩で数百元かせぎやがってよ、ちくしょうめ、やっちまえ！」というようなことを言っていたのをようやく思い出した。要するにこの暴走達の「集团的無意識」は、「排外」の上に凝集したというより、近頃の「あぶく銭」を稼ぎまくる者への嫉妬にあったというわけだ。

一台のタクシーが通りかかると彼らはワッと襲いかかり、行く手をさえぎった。運転手が中から飛び出し、両手をあわせ「兄さん方、どうか見の

がしておくなさい。まだ仕事があって、すっぱかしたらそれこそ大変なこって……」と頼みこんだので、これは放してやった。また一台タクシーがやって来た。今度も喚声と共にワッと群がり、止めてしまう。運転手が車内から首を出して「お兄さん方、いじめないで下さいよ。中にはまだお客がいるんでさあ。何かおきたらかないやせんよ。どうすりゃいいってんで……」と哀れっぽい声をあげた。ある者はゲンコツで車のドアをたたき、別の者は後部を足でけた。車に向かってつばをはきつける者もいた。滑志明はこの時も手を下さず、ただ横で声をふりしぼってワーワーわめくだけだった。ひとわたりすむと、この車も放してやった。

後でどう思い返してみても、滑志明は自分と他の連中が特に外国人、または香港・マカオの中国人の乗った車を選んでさえぎった覚えがない。彼らの心理は、明らかに85年前の「義和団」とは違うものだ。「義和団」の方は確かに「排外」をうたっていたといえる。

当時の「義和団」のおまじない、「天の神様、地の神様。ご先祖様のご霊驗。一つ三蔵法師に猪八戒、二つ沙悟淨孫悟空、三つお告げは二郎神、四つ馬超黄漢昇、五つ仏祖の濟顛様、六つ湖江の柳樹の精、七つ手裏剣黄三太、八つ明朝冷于氷、九はお医者者の華陀様で、十は托塔天王様、金吒、木吒、哪吒の三太子、天兵十万従えて……」、これを見れば、義和団の民が自分達の教養を基準にして、これまで伝わってきた民族のエネルギーを一緒くたに混ぜ合わせているのがわかるだろう。滑志明達のような、リーダーも規約も組織も目的もなく、サッカー熱が転化した結果つくり出された野次馬根性の烏合の衆に、おまじないとでも呼べるものがあるとすれば、次の様になるのかもしれない。「天の神様、地の神様、気晴らしさせて下さいませ。一つ奚秀蘭、二つ張明敏、三つ汪明荃、四つ徐小明。五つ見たいは『霍元甲』、六つみるのは

『万山千山すべて情』。七つ欲しいはGパンと、八つディスコに、華姿の化粧品。九つ好みはシャープ、東芝、日立の家庭電気製品。十は『スズキ』と『ヤマハ』、それに加えて『セイコー』『シチズン』……」まさしく彼らこそが、香港の通俗的な文化と東洋の商業文化の最も積極的な受容者なのだ。彼らが「5・19」の日に行った一部の外国人や香港・マカオの同胞に対する不埒な行動は、これらの人々が北京で見せた特権や優越感に対し、潜在意識の中でくり返され、しかも長らく抑えられていた見識の浅さ、了見の狭さ、不満、嫉妬がふき出したものにすぎない。

次にやって来たタクシーは、クリーム色のフランスのシトロエン。またまたワッとばかりにさし止めると、運転手の中から飛び出して来て、きびしくしかりつけた。「お前達、何考えてるんだ！ こんな所で何を騒いでいる……」「やっちなえ！」誰が言い出したのか、少くとも滑志明でないことは確かだが、数人がその罪のない運転手にこぶしを振り上げてつかかかっていった。追いつめられた運転手は、まずは車をすてて逃げる他なかった……。

滑志明は相変わらずワーワーわめきたてていたが、何だか胸のわだかまりが随分軽くなった気がした。「あんちくしょうの車をひっくり返しちなえ！」また誰かが声をあげたが、今度も滑志明ではない。しかし滑志明は、ここぞとばかりにその声に応ずると、車の後部にまわった。小瑛子にぎゅっと握りしめられるはずだったその手は、もたもたしながらも、車体の枠をしっかりとつかんだ。誰かの「1, 2, 3, それ！」という音頭で、彼ら全員が勢一杯力を出した。なかなかうまくいかなかったが、とうとう側面を上にするまでおし倒すことに成功した。

この時、民警の一隊がこの騒ぎの現場へとかけつけてきた。烏合の衆はサーと散った。滑志明は特に切羽詰まって一目散に逃げ出したわけでは

なく、フーッと息をはきながら、余裕たっぷりに通りの向こう側へと渡っていった。ふと気がつくと、心にわだかまっていたものが、きれいさっぱり消えてなくなっていた。良心には何の不安も感じなかった。「前科」などないから、民警をびくびくすることもなかった。この瞬間、この一日のうちで、最も軽やかな気分ですらあった……。

民警がかけ寄ってきた時には、他の連中はとっくに影も形もなかった。と、一人のがっちりした男が、いきなりわきから滑志明の腕をつかむなり、「こいつが車をひっくり返してた奴だ。まちがない！」と警官につき出した。

滑志明はこの時になってギョッとするが、抵抗もせずにおとなしくつかまってしまった。彼をつき出した男は、早くからわきで騒ぎをじっと見守っていたのだ。サッカーの試合を見にきたのではなく、自転車でそこを通りかかった国家の幹部だった。彼は警官がかけ寄ってくるまで、わざと手を下さなかったのである。よく計算していたわけだが、この目ろみが成功したのは、滑志明が本気になって逃げようとしなかったためでもある。この男は義憤にかられたのと、滑志明があばれまわるだろうという行きすぎた予測から、滑志明のバンドをぬきとって、彼の両腕をうしろにしばりあげた。滑志明は警官に臨時拘留所へとひたてられたが、「騒ぎの当事者」が続々と入ってくるため、警官達は一人一人みて回る余裕などなかった。彼らは騒ぎが完全に静まった後、明け方近く拘留者をグループに分けて車にのせ、正規の拘留所へ運ぼうという段取りになって、初めて滑志明がもう数時間もベルトで後ろ手にしばりあげられていたのに気付いた。滑志明はつかまってからというもの、何の抵抗もせず、また、車をひっくり返す騒ぎに加わったことに対する一言の弁解もしなかったのだ。

2日後、彼は法によって逮捕され、自他共に認める疑いのない犯罪行為が審査された。そして

『中国人民共和国法』第157条、または第160条の法律によって処罰されたのである。

我々は国際世論を国内世論よりもはるかに重視するようだ。香港の新聞はわざわざ訳す必要がなかったし、中国駐在の外人記者は、常に目撃者たることを自認していたから、両者の提供するニュースは、我々の最大の関心呼びおこすことが多い。外国人（あるいは海外華僑、香港・マカオの中国人）の口こみニュースですら、かなりの反響をひきおこすのである。たとえば、外国人が中国には陳景潤という者がいて、「ゴールドバッハの予想」研究に大いに成果をあげたと言え、たちまち陳景潤はほとんど民族的英雄にまでなってしまう。しかしわが中国包頭市には、陸家羲という中学教師がいて、1961年にはもう有名な「カークマンの女生徒の問題」を解決し、1980年には「シュタイナーの総合幾何学における研究」で世界最先端の水準に到達していた。ただ外国人が、その時にかけて教えてくれなかったので、彼は同年10月、貧困と病苦の中で人知れず死んでしまった。

「5・19事件」のその晩、バック先生が先をきって発した例の「排外性」を強調した速報は、わが国の関係部門がこれを、中国はじまって以来の「最も深刻な、国辱に値する事件」と判定した時に、影響を及ぼし始めたようだ。実際のところ、今回の騒ぎ以前、1981年中国女子バレーが第3回ワールドカップで、日本、アメリカチームを次々と破った時も、数千人の自転車にのった若者が天安門広場で騒ぎをおこした上、一部が日本、アメリカ大使館前までかけつけて、「打倒日本！」「打倒ヤンキー！」などと氣勢をあげた例がある。当時も国内の関係者は、中央に向かってこれらの事態を報告したが、おそらく「国際世論」がこの件に関してそれほど強い反応をみせなかったせいも、これといった追及もなくすんだの

だった。

我々はもっと冷静になる必要があるだろう。国内の世論，特に一般庶民の，そしてそのうちの青年達の，あけすけな，あるいは婉曲な，従順な，または反抗的な反応をもっと重視すべきだ。ある民族が，常に大多数の「平均的な青年」をやっかいがって，彼らを飼い慣らそうとはしても，その意見に耳を傾けようとしなければ，この民族は老化していくにちがいない……。

香港チームが香港にもどった後，コーチの郭家明は，早速次のような意見を述べた。「5・19当日，場内の騒ぎは大事でもなんでもない。こんな事は外国では当たり前だ。サッカーファンは，中国チームがブロック勝ち抜きを機会を逸したことに不満だっただけじゃないか」

バック先生の所属するロイターといえば，この時にはすでにもう中国の「5・19事件」にかかわっている暇などなくなっていた。ヨーロッパのブリュッセルで，5月29日の晩，サッカー史上驚くべき惨劇がおきたからである。騒ぎはまず，イタリアチームのユントスとイギリスチームのリバプールの試合前に始まり，両チームのファンが小ぜり合った結果，死者38名（イタリア人33名，ベルギー人4名，フランス人1名）が出て，百数名のけが人が病院に運ばれたのである。そのうち20人は重傷であった。試合終了後，一部のイギリス人ファンが市の中心で，一軒の商店の窓ガラスをテーブルで打ち破り，1千万ベルギーフラン，16万米ドル相当の宝石を奪い去った。別のイギリスファンの一人は，ナイフで刺され胃を負傷し入院した。さらに警官が荒れ狂うファンに対してピストルで威嚇を行った時，ユントスファンの一人が警官に向かって発砲するという事態までおきたのだ……。イギリス首相サッチャーは，事件発生後，イギリスサッカー協会会長と秘書長を即刻呼び寄せ，最低2年はサッカーチームのヨーロッパ派遣を行わないよう要求した。そしてイギリス政府は

25万ポンドをイタリアの被害者家族に支払ったのである。事件の当事者達は，当然法の裁きを受けたが，それはそれとしてイギリスにしろ，イタリア，ベルギーにしろ，彼らに対するこちら側の反応などは全く気にとめていない。第一，首相から一般庶民まで誰一人としてこの様なサッカーゲームで起こった惨劇が，「国の品位」を傷つけたとは思っていないのだ。

5月29日，中国サッカーチーム一時解散。

5月30日，国家体育委員主任袁偉民と，有名なスポーツ選手，郎平，李寧が「5・19事件」で特にきびしく取り調べを受けた90数人に対し，講演を行い，「わが民族の道徳的気風を高め，外国の一連の悪徳を真似ないように」と強調した。同じ日，竜潭湖の中国チーム練習場では，練習を見にくるファンが集まる側に，これまでの金網にかわって高さ2mほどの壁が築かれた。

5月31日，中国サッカー協会は，中国チームのコーチ曾雪麟の辞職届けを受理する。

6月1日から4日にかけて拘留されていた青年達は数人を残して一律に釈放される。

小瑛子は5月20日からずっと滑志明からの電話を待っていた。しかし数日たっても何の音沙汰もなかった。5月25日，まためぐってきた土曜日，とうとうこらえきれなくなった彼女は，昼に滑志明の職場に電話を入れてみた。電話のひきつき人はけんもほろろに言った。

「……あんた，あれとどんな関係なのかい？知らないふりしてるんじゃないの。それとも本当に知らないのかい。小滑は公安に逮捕されたんだよ……。『5・19事件』だよ。全く国の恥だねェ，もっとも奴も今回ちょっとハデにやりすぎたんだよ，ここじゃ万万才ってとこだがね。あいつもようやくおちつくところにおちついたってわけさ……」

小瑛子は目の前が真暗になり，全身の力が抜けてしまった。通りの電話ボックスから電話をかけていたが，ガラスにもたれかかるとじっと目をと

じて、胸の高鳴りがしずまるのを待った。それから自分の職場へ電話をかけると、今、病院で治療を受けているところだと彼女にとってはずいぶん思い切ったウソをついた。それから呆然としたまま目が据わったように、歩道をフラフラとあてもなく歩いた。気がつくと、正義路の並木道、いつも滑志明と待ちあわせをする場所に来ていた。彼女は石のベンチにすわりこんだ。少年先鋒隊の一団が、例の読書する少女の像を修復しているのが見える。涙が頬を伝わって落ちた。彼女は、耳につけていた雨だれ型の白いイヤリングをはずすと、堅くにぎりしめた。

小瑛子は公安局が滑志明をどこに押しこんだのかわからなかったし、その居場所をたずねる勇気もなかった。家の者にはまだ滑志明との仲を告げておらず、かといって、滑志明の家をたずねて様子を聞くのもきまりが悪かった。ましてや弁護士をたのむなどという技量があるはずもなく、打ちあけ話のできる気のしれた友人すら一人としていなかった。彼女は滑志明と同じ様に、「文化大革命」で徹底的にだめにされた世代に属しているのである。大混乱の中で小学校に入り、正規の授業がほとんど行われなかった「教育革命」の中で中学時代を過ごし、そのあとすぐ職待ち、そして労働者となり、「浅薄な思想」程度の水準のまま青春を迎えたのだ。

彼らは本当に我々の頭痛の種である無教養世代なのだろうか。我々は彼らを責めたり、言い聞かせたり、罰したりする以外に、自問する必要はないだろうか。我々の方にも彼らに対して何か欠けているものがあるのではないだろうか。たとえば十分な理解や許容、心遣いとか愛情とか。

小瑛子は医者の子にセクハラ証明書を手に入れることができず、ウソがばれて五月の奨励金がファイになってしまった。六月にはいると小瑛子はこれまでになく新聞に注意するようになり、「5・19事件」に関するニュースを探しはじめた。彼女はいつも

王府井大通りの壁新聞を見にいき、読み終わると正義路の並木道まで歩いて、そこに腰をおろすのだった。思い切って監獄に行ってみることも、滑家に出向いていくこともせず、両親や周囲の人に話してもいなかったが、じっと彼を待ち続ける決心はついていた。彼女はしばしば下唇をかみしめるようになり、以前には見られなかった物悲しさと毅然としたものが交ざりあった表情があらわれるようになった。

さて、今、もう一度当時を思い返して考えてみよう。もし5・19のその日、ゲーム終了後、スタンドの観衆が落ちついて和やかな雰囲気です「双方の彩やかな実演」に拍手を送ったあと、きわめて秩序正しく、速やかにゾロゾロと退出し、微笑を交しながら帰途についたとしたならば、どうであろうか。全世界と我々自身は、このような民族に対しどのような評価を下すべきだろうか。

※原題「5・19長鏡頭」（『人民文学』1985年第7期 所載）